

名寄市立大学・市立名寄短期大学

授業改善通信

第2号 (2008年3月発行)

目次

| | |
|----------------------------------|---|
| 1 “教える”ということの意味 | 1 |
| 2 学生授業評価アンケート実施報告 | 2 |
| 3 本学授業の紹介 (千葉安代講師担当「基本介護技術」) | 3 |
| 4 よりよい授業をめざして=第2回ピアレビュー報告= | 5 |
| 5 他大学の授業改善の紹介 | |
| (1) 福井県立大学の教育・学習支援への取り組み | 6 |
| (2) 大学教育学会第29回大会参加報告=他大学の授業改善の試み | 7 |
| 編集後記 | 8 |



1. “教える”ということの意味

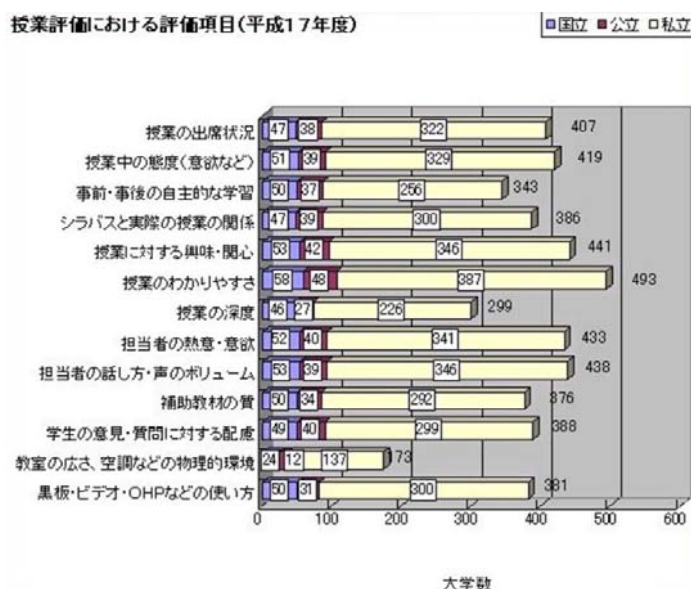
平成19年12月30日付け朝日新聞の『教える』というコーナーに、「中高生、“心の病”学ぶ」という表題の記事が掲載されました。「中高生向けこころの病気を学ぶ授業プログラム」を手がけるNPO法人が、精神科医や患者団体の助言を受けて教材開発に乗り出したという内容の記事です。その内容は次のとおりです。

…心に関する問題が生じやすい思春期・青年期にある子どもに、統合失調症やうつといった心の病気を直接“教える”…このような授業プログラムは日本の学校では少なく、「精神科医らは画期的な試み」として注目している。ではどのように教えるのか。DVDに収められた映像は、ある36歳の女性の家庭生活である。彼女は高校2年生のときに統合失調症をわずらった。今も投薬を受けているが、映像では夫や子どもと楽しげに食卓を囲んでいる。「病気とつきあいながら暮らしている」姿が映像に映し出された。このほか、「患者が働く施設の紹介」、「患者のメッセージ」も届けられた。教材は「パワーポイントを使い、その中に動画も入っている、教師用マニュアルもある、パイロット授業の様子をまとめたビデオも入っている。本教材は全国の教育委員会などに活用を呼びかけている」…この記事はたくさんの方を教えています。次にその要点を記します。

- ① なるべく自分と絡めた素材を用いる → 事例を用いる。
- ② なるべく生活場面から離れないように意識しながら教える → ある家庭の生活場面を見る。
- ③ “苦しみ”は“苦しみ”だけが切り離されてあるのではないということを実感させる → 毎日薬を飲む。
- ④ 苦しんでいる本人の訴えを聴く → 人間の生の声は迫力がある。
- ⑤ 生活場面のほとんどは動画であり、瞬間的に場面も変わる → 可能な限りありのままの素材を用いる。
- ⑥ 教える側にも、教え方のポイントを教える教材を提供する → すぐれた教材を見つける努力が必要。

「臨床心理学」をはじめとし、「臨床教育」、「臨床哲学」、「臨床栄養学」、「臨床ソーシャルワーカー」「臨床医学」「臨床看護学」など、あらゆることばに「臨床」をつける傾向のある今日、ここでいう「臨床」は、まさに今とりあげた視点を示唆しているように思えます。これらの視点は“教える”ということの本質をついているように思われます。

文部科学省のホームページによれば、平成17年度においては国立58大学(約67%)、公立49大学(約67%)、私立401大学(約73%)、国公立全体で508大学(約71%)において、全学的な学生による授業評価を実施しています。同ホームページ掲載の「授業評価における評価項目」は、教員が授業するにあたって、さしあたり何を改善すればよいのかについての目安となります。以下に重要などころのみ同ホームページより転載しました。



評価項目のベスト5は次のとおり。

- 1位:「授業のわかりやすさ」
- 2位:「授業に対する興味・関心」
- 3位:「教員の話し方・声の大きさ」
- 4位:「教員の熱意・意欲」
- 5位:「授業中の態度」

いずれも教員自身の授業に対する態度に関わる内容です。“教える”には、次のような準備が必要かもしれない。

- ① 何を教えるのかを明確化する
- ② 誰が受講するのかについての分析
- ③ 講義素材として何が必要かの分析
- ④ どのように教えるかについての分析
- ⑤ 結果についての自己評価

授業は「教えられる側の要求」と「教える側の能力」が微妙に絡み合う場です。それだけに真剣さが

必要とされるでしょう。日々の授業改善を目標に、教えられる側と教える側の双方が互いに学び合う姿勢をもちながら、歩み寄っていくといった力動性が授業改善の要となるように思われます。

2. 学生授業評価アンケート実施報告

2006年度に引き続き、授業改善委員会が学生授業評価アンケートの実施にあたりました。2007年度では、名寄市立大学・市立名寄短期大学の1、2年次開講分248科目(前期147、後期101)が評価対象になりました。前期アンケートの回収率は88.3%であり、貴重な意見を多数集めることができました。また、更なる授業改善を図っていくために、2007年度後期実施分より、アンケートの方法について以下の変更を加えました。

- ① 複数教員で担当する科目に対応できるように、新たに教員毎のコメント欄を設けた。
- ② 自由記述の中に、内容の意味がよくわからず、担当教員が対応できないものがあること、そして、学生の意見に対して、責任ある対応を心掛けることの2点から、自由記述のみ記名式とした。(択一式の質問項目については、直接マークシートに記入させているため、無記名を保持している。)
- ③ 講義科目については従来通り、当委員会のアンケートを用いて授業評価を実施するが、臨地実習等、実習先の担当者等が実質評価を行う科目についてはアンケートの対象としない。
- ④ 実習、演習、実技、実験等の科目については、担当教員が、当該科目が評価項目に対応するかどうかを判断したうえで、授業評価アンケートの対象とするかどうかを決める。
- ⑤ 担当教員が「授業評価アンケートの対象としてなじまない」と判断した科目については、担当教員が独自に授業評価を行い、授業改善に努める。

なお、アンケートの集計結果と、自由記述に対する各担当教員からのコメントにつきましては、本学FD委員会が発行する「学生授業評価報告書」をご覧ください。今後も学生授業評価アンケートを実施しますので、皆さんからの積極的な評価・意見をお願いします。

3. 本学授業の紹介

第2回目の授業紹介は、社会福祉学科講師の千葉安代先生ご担当の「基本介護技術」です。以下は千葉安代先生による執筆内容です。

……社会福祉学科では2年生を対象に介護員養成研修2級課程を開講しており、基本介護技術は資格取得のための必修科目である。ただし本学生は、将来社会福祉士として活躍することが目標である。よって、多職種理解と協働の意義を学ぶ場となること、支援すべき対象は“人間”であることを大前提に、コミュニケーションを重視した関わりを意識できること、さらに、相手の立場に立って相手にとって安全・安楽な技術の習得を目指すことを目的としている。

【授業形態とねらい】

1) 体験学習が約8割、座学が約2割

演習授業であり、体験と座学の組み合わせにより実感を伴いながら理解を深める。さらに、自分の身近な生活に置き換えて考えられることで、学ぶ価値を実感することをねらいとする。

2) グループダイナミックスの活用

福祉の仕事は対人援助を主たる内容とすることから、技術のみが単独で存在することはない。対人援助の学習では人間関係そのものが対象であり、グループの存在も不可欠と言える。個人の成長と共に、グループメンバーとの相互作用によって、互いに学び共に高めあえる関係の構築を期待した。

3) まずは“考える”

介護技術で重視すべき点は、援助方法の原理原則を理解し対象の状態に合わせて応用できることである。そのためには、人間の身体のおしくみやメカニズムを知ることが必要であり、その理解があれば方法はいかようにも創意工夫できるものである。自らの身体こそ立派な教材であり、動かし、動かされる体験と、苦痛と安楽を感じながら、より良い方法が考えられる。また、人の痛みに近づくことができる。

【授業の展開】

1) ゲームという名の演習

ゲームの良さは楽しみながら実感を心得て学ぶことにある。授業への動機付けをする最良の機会であるオリエンテーションでは、対象≠物体、対象=人間であること、故に関係形成の必要性があること、その学びの過程でコミュニケーションは欠かすことのできない技術であることを強調した。「単方向・双方向コミュニケーション」演習を通して効果的な伝達法について考えた。他に、「ミラーワーク」(非言語的コミュニケーションの実践)、「ブレインストーミング」「協力ゲーム」などを授業の進行状況に合わせて実践した。いずれも“援助者のためのコミュニケーションと関係づくり”への理解を目的とした内容である。

2) 相手の気持ちに近づく体験

学生の“介護”に対するイメージは、「寝たきりで一人ではどうしようもない人を助ける」「介護は力」「全介助することが楽なのでは」「全部こちら(介助者)が手助けする」などといったイメージも多い。しかし、技術は人間の身体のおしくみやメカニズムを活用した実に理にかなった行為でもある。演習では、介助する側・される側の体験を行う。特に介助される側の体験は貴重であり、この体験が介助者としての立場で活かされることを期待するものである。

3) 授業展開の困難性と学生が抱える課題

グループワークの取り組みから感じることは、学生間の関わりのごちなさであり、グループダイナミックスを有効に機能させるための素地の乏しさである。授業の性質上、互いに密着した関わりをもつこともある。その実践のためには、まず学生同士の関係性を整えることが必要になった。ゲームという名の演習を通して、関係性の要素となる「支えあえる(安心できる)風土作り」を意識的に行った。学生には、ゲームに取り組みつつ、最終的には何をねらいとした演習であったのか考えることを求めた。これは、丁度8回目の授業を主として展開したのだが、その後の学生の変化に効果的であった。

4. よりよい授業をめざして =第2回ピアレビュー報告=

2007年10月10日(水)、名寄市立大学本館321・322教室において、授業改善委員会主催による、「第2回ピアレビュー」が開催されました。本企画の目的は、「教員同士が相互に授業を公開し、授業法の改善を目指して話し合う中で、教員の授業能力を高めていく」ことにあります。以下、ピアレビューの概要をお伝えします。

本年度のピアレビューは、昨年同様、授業参観と参観した授業を基に授業方法に関するディスカッションを行うという2部構成で実施した。1部の授業参観には20名、そして2部のディスカッションには15名の教員が参加された。1部では、教養教育部の白井暢明教授が担当している「倫理学」の授業参観を行った。倫理学は、全学共通で2年次の後期に、選択科目として開講されている。ただし、教職課程における必修科目となっているため、受講生は社会福祉学科の学生が多いとのことであった。今回の講義主題は、「宗教における倫理規範」で、内容は宗教の概要と、宗教の意味、宗教がもつ共通性などであった。授業は、講義法によって進められた。講義は白井教授による「なぜいじめは悪いのか、なぜ…」という学生に対する質問から始まった。白井教授が資料を基に説明する場面と、白井教授が発問して学生が答えるという場面が多くみられた。また、全体を通して白井教授は教室内を移動し、学生への目配りも行っていた。授業終了後には、出席カードとして学生の意見をもらうこともしていた。

2部は、白井教授から「時間の関係もあるので、皆さんから意見をもらう場としたい」という申し出があり、早速質疑応答、意見交換を行った。応答は大変活発に行われ、その内容の一部を次に紹介する。

プレゼンテーション方法として、今回の講義で白井教授は、自ら作成した資料と黒板を使用した。その他の視聴覚教材を用いて宗教の特徴的な映像などを活用し、学生の理解を助けるとよかったのではないかと意見があった。これに対しては白井教授も同じ意見を持っていた。授業内容の組み立てについて白井教授は、「そもそも学生は倫理についての論理的な思考にそれほど関心があるわけではないので、学生が興味を失わないように出来る限り実践的な話を組み込むように工夫している。実践的な側面から倫理学を考えたほうがよいと思う」と説明した。それに対しては、参加した教員からも宗教を背景とした社会的な見方が面白かったので、内容の工夫がされていたなどという意見があり、講師の意図が伝わる授業であったことが確認された。授業内容については参加した教員から「新興宗教の問題をどのように絡めたらよいのか」「一般的に学生自身に考えさせるいい授業だった」などの意見もあった。

さらに興味深かったのは、学生へ提示した資料の内容についてのディスカッションである。白井教授が学生へ提示した資料は、細部にわたり解説されたものだったが、キーワードのみを示す資料の作成法もある。このどちらが、学習効果上がるのかという質問がなされた。白井教授は、今回は学生がノートを取るということよりも、授業内容の理解を助けることを意図して資料を作成したと話された。一方で、学生が自らメモを取る資料の作成方法も、学習効果をあげるための一つの方法ではないかと説明された。また、他の参加者からは、授業の目的や内容によって資料の作成方法が異なるということから考えると、今回のような考えさせる講義では、このような資料提示が効果的であったのではないかと意見も出された。



さらに興味深かったのは、学生へ提示した資料の内容についてのディスカッションである。白井教授が学生へ提示した資料は、細部にわたり解説されたものだったが、キーワードのみを示す資料の作成法もある。このどちらが、学習効果上がるのかという質問がなされた。白井教授は、今回は学生がノートを取るということよりも、授業内容の理解を助けることを意図して資料を作成したと話された。一方で、学生が自らメモを取る資料の作成方法も、学習効果をあげるための一つの方法ではないかと説明された。また、他の参加者からは、授業の目的や内容によって資料の作成方法が異なるということから考えると、今回のような考えさせる講義では、このような資料提示が効果的であったのではないかと意見も出された。

このほか「成績評価の基準を教えてください」「課題レポート

の書き方（書式）はどのようにしているのか」など、細部にわたった質問も出された。また「私は個人用レポートを受講生全員分用意し、それに毎回出席代わりのサインと、感想、意見を書かせている。それに対して次の講義時、適宜フィードバックしている。そうすれば半期講義で、教員が用意する分は学生ひとり A4 版用紙 2 枚くらいで収まる」という参加教員の授業改善例も紹介された。

このように、授業法に関する建設的な意見交換が多くなされたことから、今回のピアレビューは、当初予定していた目的に沿った会となったと思われます。今回、白井教授や参加された教員の皆様に助けられ、第 2 回ピアレビューを無事終了することができました。このことに感謝し、今後もピアレビューが継続され、本学の授業改善が促進されることを期待いたします。

5. 他大学の授業改善

(1) 福井県立大学の教育・学習支援への取り組み

昨年度に引き続き他大学の授業改善に対する取り組みについて取り上げることになりました。しかし、他大学の授業改善といっても同じような取り組みが多いのも事実です。前回紹介したティーチングティップスも名古屋大学だけでなくさまざまな大学で実施されてきています。そのような中で福井県立大学の取り組みを耳にする機会があり、ここで紹介することにしました。

福井県立大学では 2007 年度より「教育・学習支援チーム」を立ち上げ、教育力の向上を目指し、教員の教育活動と、学生の学習を支援することを目的としています。活動の中心は、ファカルティ・ディベロップメント(FD)と教育の情報化となっています。このチームはもともと FD 部会という形で数年前から始まったようです(1992 年に開設した大学としてはかなり遅い取り組みであると福井県立大学の方は自覚しています)。

今回はこのチームの目的のひとつである教育の情報化について紹介したいと思います。情報インフラの進歩にしたがい、授業の実施や学習(予習・復習)に情報端末やネットワークは欠かせないツールになったと言えます。これらを使用した場合の教育効果の是非もさまざまです。確実にいえるのは、情報端末を使ったから教育効果上がるものではないということです。これらを使用しないときの授業方法と同じやり方では逆効果になる可能性すらあります。しかし、これらのツールを効果的に利用し、教育効果をより上げることは学生にとってプラスになることは間違いありません。したがって、教員はこれらのツールに合った授業方法を試行錯誤しながら、見出すしかありません。

福井県立大学ではツールのひとつとして WebCT を用いた e-ラーニングを薦めています。e-ラーニングというと、遠隔教育や、電子的に用意された教材で学習するためのものといった無機的なものを想像する方がいるかもしれません。この WebCT は対面授業をサポートするものとして利用できるものです。例えば、授業の教材を作成し、配布することが可能となります(教員による膨大な印刷作業の省力化)。予習・復習のために演習問題や小テストのようなものを提供することもできます。また、教員が不在のようなときにも学生は自由に質問することができ、どこからでも(出張先であっても)教員はそれに回答することもできます。さらに、授業が 1 回終わるごとに授業アンケートを独自にとることも容易なため、次の授業に反映することも可能です。もちろん、レポートの提出やその添削、成績管理もできます。WebCT の利用範囲はとても広いわけですが、その効果的な利用方法はまだ模索中といえます。福井県立大学では教員自身が実施できるものから WebCT を用いてみることを勧めています。もちろん、こういったツールに不得手な教員やこれらを必要だと感じない教員もおられます。そのため、初めて WebCT を利用する教員のために初歩的な使用方法をマニュアル化しています。また、学内 WebCT シンポジウムを開き、すでに WebCT を利用している教員から実践例を講演してもらい、利用法に関する工夫の共有を行っています。つまり各教員の工夫を公開し、より効果的に WebCT を用いた e-ラーニングが展開できるようにしているわけです(授業法の工夫を集約する点はティーチングティップスと同じ考え方といえます)。さらに、講習会も実施しており、大学全体で WebCT を用いた e-ラーニングを推し進めていることが伺えます。

今後、本学でも e-ラーニングは必要なツールとなっていくと思います。おそらく将来的にほとんどの教員がこ

れにかかわらずに授業を展開していくことはなくなっていくと思われまふ。昨今の情報化の流れは急ですが、積極的にこのようなツールを用いて、学生の理解がより深まる方法を見つけ出すことが重要だと考えられます。そのためこのようなツールを利用した授業方法の工夫に関する Tips を集めることが重要になってくるでしょう。

(2) 大学教育学会第29回大会参加報告＝他大学の授業改善の試み

当日参加も可能とのことで、2007年6月9日(土)・10日(日)に東京農工大学小金井キャンパスで開催された「大学教育学会(旧称・一般教育学会)第29回大会」に出席してまいりました。予算ぎりぎりの旅行命令(2泊3日)でしたので、前泊して初日9:30開始の「ラウンドテーブル」から2日目12:00終了の「自由研究発表」までで帰るのか、それとも後泊にして初日14:20の「基調講演」から2日目16:00までの「シンポジウムⅡ」で帰るのか、迷ったところでしたが、結局、6月9日14:00の「学長挨拶」、14:20の「基調講演」、15:50の「シンポジウムⅠ」、6月10日9:00の「自由研究発表」、13:00の「シンポジウムⅡ」、16:00の「閉会」に参加することができました。

大会の総合テーマは「持続可能な社会と大学」であり、まず、吉川弘之氏(元東京大学学長・元放送大学学長)による基調講演「持続性科学の使命」では、かつて経験することのなかった地球規模の危機という問題と、そのための新しい教育の必要性について考えさせられました。

次のシンポジウムⅠ「持続可能な社会と教養教育」では、小笠原正明氏(東京農工大)の企画により、シンポジウムの柄内新氏(北海道大)、玉真之介氏(岩手大)、戸田山和久氏(名古屋大)、指定討論者の亀山純生氏(東京農工大)とフロアの参加者との間での熱心な討論があり、啓発されることが多くありました。

翌日午前の自由研究発表は、9会場で50を超える発表がなされましたが、今回はFD委員会委員としてではなく、授業改善委員会委員として出席した関係もあり、FDよりは「授業改善」にかかわるもののほうを多く見聞する結果となりました。各大学における具体的な取組みがたくさん報告されていて、資料もいっぱい入手することができ、とても参考になりました。

2日目午後からのシンポジウムⅡ「教育と研究を考える」でも、舘昭氏(桜美林大)の司会により、シンポジウムの永宮正治氏(高エネルギー加速器研究機構)、安岡高志氏(東海大)、飯吉弘子氏(大阪市立大)とフロアの参加者との間で、尽きることのない議論が展開され、たいへん面白く学ばせていただきました。

大学教育学会は会員が一つの学問領域に固定されておらず、多様な領域の研究者が中心であるために、非常に学際的であったと思います。

約170ページの『発表要旨集録』だけにとどまらず、2日目午前の「自由研究発表」で配布された資料が、かなりあり、中でも名古屋大学高等教育研究センター&名古屋大学学務部学務企画課による『ティップス先生からの7つの提案：教務学生担当職員編』という可愛いイラストの入った2007年5月25日発行の新しい冊子(ISBN978-4-901730-98-3)が特に印象に残りました。これは、よりよい教育を実現するための具体的方法をまとめた『ティップス先生からの7つの提案』の5冊目の冊子にあたり、これまで「教員編」「学生編」「大学編」「IT活用授業編」としてまとめられてきたものの続編とのことでした。

たしかに、大学時代の学生の学習や発達は授業という枠には収まりきれません。そこでは、大学教員だけでなく大学職員も重要な役割を担うことになるというわけです。7つの提案はどれも簡潔で覚えやすいものにしてあり、それぞれに7つずつの箇条書きのアイデアが盛り込まれていますから、全体で49ものアイデアが記載されておりました。提案1は「学生と教職員と接する機会を増やす」、提案2は「学生間で協力して行う学習を支援する」、提案3は「学生の主体的な学習を支援する」、提案4は「学習の進み具合をふりかえらせる」、提案5は「学習に要する時間を大切にさせる」、提案6は「学生に高い期待を寄せる」、提案7は「学生の多様性を尊重する」となっていて、本学や他大学でも活用できるものであると感じました。

大学教育学会に出席いたしますと個人的にも随分と触発されて、大学に戻ったらこんな授業改善ができるかもしれないと考え始めている自分に気づき、いつの間にか自己の意識も自然と変革されていたのを実感いたしました。また、大学教育学会には今後も教員だけでなく大学職員も含めた形で継続して積極的に参加していけるとよいのではないかとも思えるようになりました。大学教育学会に参加することにより、普段であればなかなか体験することのできなかつた「授業改善漬け」の時間を過ごすことができましたことを、ここに報告いたします。



(写真：名寄市立大学構内 左；本館前、中央；正門、右：新館と恵陵館の通路)

名寄市立大学は2006年4月に新設されました。保健福祉学部看護学科、栄養学科、社会福祉学科、そして既設の市立名寄短期大学児童学科で構成される日本最北の公立大学です。市立名寄短期大学は2008年4月以降、名寄市立大学短期大学部と改称されます。今後とも、地域に根ざした教育を展開していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

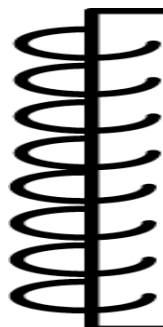
授業改善委員会へのご感想・ご意見をお待ちしています。各学科委員あてにお伝え下さい。

【編集後記】

名寄市立大学は平成18年4月に新設され、本年4月、満2歳を迎えます。人間であれば、ようやくひとり歩きができる頃となりました。大学を創設するという明るい話にはきまって難産の苦しみに伴うもので、本学もその苦しみを味わっています。しかしその苦しみは産みの苦しみであり、苦渋の中に喜びを伴うものでもあります。本学が学生、教職員、市民の大学であり、人々が大学をつくるという姿勢を忘れず、そして人間が生き生きと過ごすことができるような大学であることをめざしたいと思っています。

大学における学びの中には授業以外にもさまざまありますが、“授業”が大切な位置を占めていることは周知のとおりです。本学は学ぶことの楽しさ、すばらしさを学生、教職員がいつそう体感できるような授業改善に取り組む覚悟しております。第2号「授業改善通信」では、最初に“教える”ということの意味と視点についてまとめてみました。次に学生授業評価アンケートの実施報告を行いました。現在、よりよい授業評価項目の設定について模索中です。本学授業紹介では、千葉安代講師担当の「基本介護技術」を取り上げました。第2回ピアレビューでは哲学専攻の白井暢明教授に授業公開をお願いしました。授業は大学が独り占めするだけでなく、高大連携や研修・講演等で近隣の諸機関にも貢献できるように活用していきたいと思っています。最後に他大学の授業改善の紹介として、福井県立大学の教育・学習支援への取り組みを取り上げました。さらに大学教育学会第29回大会での参加報告の中で、他大学の授業改善の試みにもふれました。これらの成果のひとつひとつを次の授業改善につなげていければと思っています。

(授業改善委員一同)



発行日：平成20年3月31日
編集・発行：名寄市立大学・市立名寄短期大学授業改善委員会
委員：石川貴彦（教養教育部）・西村直道（栄養学科）
高岡哲子（看護学科）・小山充道（社会福祉学科）
糸田尚史（児童学科）

以上 5名